

安政六年、開港をめぐる桐生新町の動静

松浦利隆

The Situation of Kiryu-shimachi in Ansei 6, around the Time of the Port Opening

はじめに

- ① 在郷町桐生新町の状況
- ② 開港期の生糸貿易
- ③ 桐生新町の対応1……幕府への嘆願運動
- ④ 桐生新町の対応2……張訴騒動と糸商人の処罰
- ⑤ 桐生新町の対応3……救い米の支給
- ⑥ 騒動の終焉とまとめ

【論文要旨】

安政六年六月の開港は国内の経済構造に大変化をもたらし、幕藩体制が崩壊するきっかけを作った大事件である。そこで初期の生糸不足により大混乱におちいった関東随一の織物産地である上州桐生新町がこの事件をきっかけにどう変化したかを考察した。

この混乱へ桐生新町の対応は三つの段階に分けられる。最初の段階は幕府への生糸輸出禁止や在郷商人の取引抑制を中心とした嘆願の段階である。夏から冬にかけて続いた嘆願は大老への駕籠訴までエスカレートしたがついに何の効果も無かった。

次が嘆願の失敗、冬を迎えて困窮の進展により抑えきれなくなった町内の織物職人・労働者（Ⅱ小前層）の不穏な行動とそれを地元商人処罰等によって懐柔し、さらなる先鋭化を抑えた段階である。

最後に翌春の町役人層と小前層の相互の直接的な対向関係、つまり小前層の打ち壊

しを材料にした各種要求、町役人層の権力を動員した抑圧と施米等の実施による懐柔といった従来の支配関係を超越した両者の力のバランスが町政を動かす段階である。

このように開港という新状況は、まずは幕府による経済統制がもはや無力であることを露呈させ、さらに地域においても従来の社会機構や制度が機能不全におちいった側面を強調してゆく過程であり、そこから生じたのは従来の身分制度の枠にとらわれない経済的な階層格差を背景にした混乱と対立であった。かつ、その解決（Ⅱ救い米等）がこの新情勢から経済的な恩恵を受けたと思われる階層（Ⅱ生糸商人に代表される）の経済力によって支えられる新状況をもたらしたわけである。このように安政六年の桐生の事例は、開港と開放経済が封建社会の基礎を揺るがし、最終的にはそれを突き崩してゆく歴史過程のひとつの端的な事例といえるのではないだろうか。